



その8

# 貝原益軒

—かいばらえきけん—

(平成22年5月1日号—第266号)



貝原益軒は、江戸時代前・中期に活躍した儒学者・博物学者・大衆教育家で、寛永7年（1630）福岡藩祐筆[ゆうひつ]の子として福岡に生まれました。長らく損軒[そんけん]と号していましたが、79歳のときに益軒と改めました。

彼の著作は数多くありますが、『筑前国続風土記』[ちくぜんのくにしよくふどき]『大和本草』[やまとほんぞう]『養生訓』[ようじょうくん]などは特に有名です。また、生涯を通じて各地を旅し、数々の紀行文を著しています。

元禄2年（1689）京都に滞在していた彼は、河内・和泉・紀伊・大和の名所をめぐる旅に出かけます。その様子を記したのが『南遊[なんゆう]紀行』です。京都から淀・八幡を経て洞ヶ峠を越え河内に入り、田口・郡津を過ぎ、私市に宿ります。翌日、獅子窟寺[ししくつじ]に登り、天野川を見下ろした様子を次のように記しています。

「その川、東南に直[すぐ]（まっすぐ）に流れ、砂川にて水少なく、その河原白く広く長くして、あたかも天上の銀河の形のごとし。[中略]天の川と名付けしこと、むべなり（もつともだ）。」

その後、諸国をめぐる京都への帰途、枚方宿に一泊しました。

江戸時代を通じて、枚方は「牧方」と表記されることが一般的でした。読みはもちろん「ひらかた」です。彼は、これを誤りととらえ、次のように記しています。

「世俗あやまって牧方と書く。枚の字を書くべし。一枚二枚を二[ひと]ひら三[ふた]ひらと訓ず。」

しかし、「牧方」の表記は「枚」の異体字として「牧」が用いられていたもので、あながち誤りとは言えません。

天野川の南岸に宿をとった彼は、在原業平[ありわらのなりひら]の歌「かりくらしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり」を思い起こして、興に入っています。

翌日、禁野・渚を通り、藤原俊成[ふじわらのしゅんぜい]や業平の歌に思いをはせ、京都へ帰りました。



獅子窟寺付近からの眺め